

陽明文庫蔵二十卷本『類聚歌合』の仮名遣

長谷川千秋

一 はじめに

二十卷本『類聚歌合』は、堀河朝（一〇八六―一一〇七）より大治二（一一二七）年頃までの約二十年にわたって編纂された歌合の証本集成である。萩谷朴（一九五七）によれば、編纂当初は「和歌合抄」として堀河帝のもと源雅実らによって編纂されていたが、堀河帝の崩御の後に、雅実の甥の藤原忠通が編纂事業に加わり、新たな編纂方針のもと、雅実方の「古今歌合」、忠通方の「類聚歌合」として第一次（元永二年から保安二年）の増改編が行われ、さらに第二次（保安二年以後大治元年八月以前）、第三次（それ以降）と増改編が続けられたが、遂に完成をみることはなかったという。この二十巻のうちの十七巻に及ぶ草稿が陽明文庫に所蔵されている。

二十巻本『類聚歌合』が編纂のために書き継がれた十二世紀前半という時期は、日本語表記史にとって仮名遣の過渡期として重要である。八行転呼音現象、「オ」「ヨ」の音韻的区別の混同という十一世紀前半まで起きた音韻変化は仮名表記に混乱を与え、結果として十二世紀末から十三世紀初めにかけて藤原定家によって和歌や物語での表記に仮名遣が定められることとなった。したがって十二世紀の表記は定家の

仮名遣にとって背景となる様相を呈していたはずである。すでにこの時期の仮名遣の実態は、今野（二〇〇一）、遠藤（二〇〇四）他によって明らかにされている。筆者も『永縁法師奈良房歌合』について報告したことがあるが（長谷川（二〇〇七））、尚この時期の仮名遣調査を積み重ねていく必要があるように思われる。そこで、本稿では、陽明文庫に所蔵される二十巻本『類聚歌合』の「アハワ行」の表記について実態を報告する。二十巻本『類聚歌合』は、堀部（一九四五）によって二十三種の筆跡に分類され、筆跡と使用された罫紙の種類から、編纂時期が推定された。その後、萩谷（一九五七）によって両者の関係がより明確に整理された。それによれば、現存する二十巻本の筆跡は目録を含め十七種二十二類に及び、このうち陽明文庫所蔵分では九種十三類に類別されるということである。本稿では陽明叢書『平安歌合集』に所収された影印四十三度の歌合を調査対象とした。陽明文庫に収められていない歌合の調査については今後の課題としたい。

二 歴史的仮名遣との近さ

まず、当該資料の表記が全体として歴史的仮名遣からどの程度の近

表1 歌合別 アハワ行の歴史的仮名遣と一致しない語数（異なり語数）

推定書写時期	歌合主催年	歌合										和文 歌数	歌数	異 紙	筆跡												
		ほ↓お	を↓ほ	ほ↓を	え↓ゑ	ゑ↓え	え↓へ	へ↓え	ゑ↓へ	へ↓ゑ	う↓ふ					ふ↓う	い↓ゐ	ゐ↓い	い↓ひ	ひ↓い	ゐ↓ひ	ひ↓ゐ	わ↓は	は↓わ	を↓お	お↓を	
	1066											1										17	B	一乙	0501		
初	1056							2												1		有	20	A	二甲	0502	
初	1089			1						1										1	1	2	24	A	二甲	0503	
初	1083																					1	12	A	八	0701	
	973		1																			有	—	A	一甲	0801	
			1	1				1				1						1				1	44	A	二甲	0801	
初	1040							1				2						1				1	40	A	一甲	0802	
初	1083			1																			20	B	一乙	0803	
初	1049																						25	A	一甲	0804	
初	1048																						12	A	一甲	0805	
初	1050							1															24	A	一甲	0806	
初	1050																						6	A	一甲	0807	
初	1051			2																			42	A	一甲	0808	
初	1051											1										有	17	A	一甲	0809	
初	1055		1																				22	A	一甲	0810	
初	1056							1										1					22	A	一甲	0811	
初	1056																						12	A	一甲	0812	
初	1056							1															14	A	一甲	0813	
初	1057																	1			1		24	A	一甲	0814	
初	1057			1														1					30	A	一甲	0815	
初	1050							3				1						1			1	有	6	A	二甲	0901	
初	921			1				1				1										1	有	66	A	二甲	0902
初	943																						39	A	一甲	1001	
初	948			3																		1	1	47	A	二甲	1002
初	893																					1	2	71	A	二甲	1003
初	927							1														有	—	A	一甲	1101	
																							22	A	二甲	1101	
初	927-																						20	A	二甲	1102	
初	956			1																			21	A	二甲	1103	

推定書写時期 初…「和歌合抄」編纂当時、二…第二次改編、三…第三次改編

歌合	筆跡	置紙	歌数	和文	お↓を		は↓わ		わ↓は		ひ↓あ		あ↓い		い↓あ		ふ↓う		う↓ふ		へ↓え		え↓へ		え↓え		え↓え		ほ↓を		を↓ほ		ほ↓お		推定書写時期	
					有	無	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無		
1104	二 甲	A	45			1																											977	初		
1105	十一	A	42			1			1																								1003	初		
1106	十二	N 無	33	有							1																						1028	載出		
1107	二乙	B	27																														1049	三 二 載出 と初		
1108	一乙	C	—	有						1																							1094	三 載出		
1401	二丙	E 背	30																															1118	三	
1501	一甲	A	10																														988	初		
1502	一甲	A	30																															1056	載出	
1503	二丙	E 背	36																															1118	三	
1504	一丙	E	32																															1096	三	
1505	五	B	22	有						1																								1104	三	
1601	十三	E	27	有																														1025	二	
1801	一丙	N 背	16																																1121	三
1802	※	N 背	36																																1121	載出
9901	二甲	C	—	有																														1056	二 載出	
9902	一甲	A	10																															1057		
9903	一甲	A	10																																	
					総語数		8		19		6		6		0		4		0		0		6		0		3		1		0		0		0	

歌合一覧

- 卷第五・后宮下—0501皇后宮歌合天曆二年、0502皇后宮歌合天喜四年本文、0503太皇太后宮扇合
- 卷第七・内親王下—0701女四宮侍所歌合
- 卷第八・斎宮付斎院—0801斎宮歌合天禄三年、0802斎宮歌合長久元年、0803斎宮歌合永保三年、0804斎院歌合冬五題十番、0805斎院歌合夏六題六番、0806斎院歌合仲春十二題十二番、0807斎院歌合菖蒲一題三番、0808斎院歌合春三題廿一番、0809斎院歌合夏三題三番、0810斎院歌合一物語題九番、0811斎院歌合暮春十二題十二番、0812斎院歌合夏一題六番、0813斎院歌合初秋六題七番、0814斎院歌合夏二題十二番、0815斎院歌合秋十五題十五番
- 卷第九・女御・御息所—0901麗景殿女御歌合、0902京極御息所歌合
- 卷第十・親王—1001陽成院一宮歌合、1002陽成院第一親王姫歌合、1003仁和二宮歌合
- 卷第十一・大臣家上—1101小一条太政大臣家歌合、1102本院左大臣家歌合、1103坊城右大臣家歌合、1104三条左大臣家歌合、1105太政大臣家歌合、1106関白左大臣家歌合、1107関白左大臣家藏人所歌合、1108前太政大臣家歌合
- 卷第十四・参議・非参議—1401右兵衛督家歌合
- 卷第十五・雲客上—1501藏人頭家歌合、1502頭中将家歌合、1503新中将家歌合、1504兵衛佐家歌合、1505左近権中将家歌合
- 卷第十六・雲客下—1601東宮学士家歌合
- 卷第十七・大夫家—1801内藏頭家歌合七題八番、1802内藏頭家歌合三題十八番
- 別置分—9901皇后宮歌合天喜四年、9902斎院歌合九月十三夜、9903斎院歌合立秋

さにあるのかということを見ておきたい。表1は、各歌合の歴史的仮名遣と一致しない語数（異なり語数）を、それぞれアハワ行の仮名毎に示したものである。表の「お↓を」とは、「歴史的仮名遣で「お」に書く語が「を」と書かれる語」の意である。個々の歌合の名を示さず、便宜上私に付した番号を用いた。歌合毎の書誌は萩谷（一九五七）および陽明叢書『平安歌合集』解題（同氏による）にあるのに従った。

集計の方針として、仮名遣を異にする語が掛けられている場合には数値に含めない。例えば、次の「なを」のように、皇后から女房下野への返歌として、「なを」に「なほ（猶）」と「名を」が掛けられるような場合である。

御返し

いつれともはなのほひはわかれぬに／なをしもつけのなつかし
 きかな （巻五后宮下・皇后宮歌合治暦二年）

さて、歌合四十三度のうち八度はすべての表記が歴史的仮名遣に一致するという結果である。これ以外の歌合では、異なり語数にして2語〜11語程度の不一致例を含む。歌合全体の歴史的仮名遣に合致しない語（異なり語数）の計は、オ・ヲの音韻的区別の混乱について、「お↓を」19語、「を↓お」8語である。八行転呼音現象については、八行を発音通りにワ行に書くものとして、「は↓わ」6語、「ひ↓る」4語、「ふ↓う」1語、「ほ↓を」15語がみられる。八行転呼音の誤った回歸に関するものは、「わ↓は」6語、「う↓ふ」3語、「ゑ↓へ」6語、「を↓ほ」4語である。イ・ヰの混乱のかなり早い例として「ゐ↓い」に2語、「まいる」「まいらす」がみられる。いずれも歌合を通して「い」表記であり「ゐ」表記は検出されない。これは「まいる」が、山内（一九七二）によってイ・ヰの混乱の先駆けとなる個別的变化が指摘されていることと整合し、今野（二〇〇一）によって、藤末鎌初の和歌資料に「ま

いる」の表記の固定が指摘されていることも見合う。エ・エの「ゝ（ら）うゑい」（朗詠）は漢語の例でやや特殊である。「まいる」「まいらす」「ゝ（ら）うゑい」以外で、歴史的仮名遣と合致しない表記がなされる語を以下に示しておく。重点の使用による仮名違いが、助詞「を」の場合を含め、3例みられた。

お↓ををく置・かきをく・うたかひをける・すてをく・たてまつりをく・さためをく・をく置起・をる織・をりしく織・をりも
 の・をのつから・をのか・をのく・をとり劣・をそし・をもみ・をと・をひ生老

（重点）をゝろし下（齋宮歌合長久元年0802）

を↓おおのへ・おとる踊・おはな・おかし・おかしさ・おかしけ・おる折・おとこ

は↓わうわのそら・うわき・なわしろ・うるわし・あまのかわら・すわう

ひ↓ぬしゐて・やまる・ゆける・たなこゝろ
 ふ↓うとをたうみ

ほ↓ををとをし・とをたうみ・なかとを・とをやま・とをち・なを・さをかは・さをひめ・さをやま・いを庵・いくしを・ひとしを・にをひ・なをし（重点）にゝをはし（皇后宮歌合天喜四年9801）
 わ↓はよはく・さはく・さはかす・くつはむし・かはく・いそは

う↓ふうふ植・すふ据・おもふたまへ

ゑ↓へこすへ・すへ末・うへ植・すへ据・ゆへ・ゆくすへ
 を↓ほかほり・かほる・しほに

（重点）あさかほゝ助詞（齋宮歌合0801）

一覧のうち「ゑ↓へ」に「うへ（植）」「ゆへ（故）」が見えている

が、四節に示すように、それぞれ「うゑ」「ゆゑ」の表記もあり、「まい」る「まいらす」のように固定化はしていない。

調査結果から、陽明文庫蔵二十卷本『類聚歌合』において、歴史的仮名遣と一致しない表記がとられるのは、基本的に八行転呼音現象に関する場合とオ・ヲの一部に限られるといえよう。その「一部に限られる」ということがどの程度であるのか、つまり歴史的仮名遣との近さはどの程度であるのかという問題を次には総語数という角度からみておく。当該資料の中から『齋宮歌合天禄三年』(表の080)を取りあげ、仮名遣が問題となる仮名を含む語の総語数と、そのうち歴史的仮名遣に不一致となる語数を比較してみることとする。一度の歌合であるからこれは見通しにすぎない。

『齋宮歌合天禄三年』は村上天皇第四皇女親子内親王による秋前裁十題三十三首の歌合で、歌合に加えて、源為憲による仮名日記、源順による判詞と判歌十一首が記される。冒頭の仮名日記五行目までが第一種甲類の筆で、それ以下が第二種甲類の筆に分類される。四十四首という歌数は、一度あたり平均二十七から二十八首の歌数をやや上回り、量的には適当である。歴史的仮名遣に合致しない語の数は11語と歌合の中では最多に属している。

表2は、『齋宮歌合天禄三年』のアハワ行の仮名(アを除く)を含む語の総数(「を」「お」以外は語中のみ)と、歴史的仮名遣に一致しない語の数を示したものである。この歌合は、歴史的仮名遣と一致しない語数の比較的多い歌合であるが、総語数からいえば不一致の語の数はかなり少なく、歴史的仮名遣に近い表記がなされていることがわかる。

歌合毎に数の相違は予想されるが、二十卷本『類聚歌合』の歴史的仮名遣との近さは保証される結果であろう。

表2 『齋宮歌合天禄三年』アハワ行の歴史的仮名遣との対応

	は	わ	い	ひ	み	う	ふ	え	へ	ゑ	お	ほ	を
総語数	20	2	2	23	1	6	20	4	14	4	41	14	20
不一致	0	1	0	0	1	0	0	0	0	1	5	1	3

個々の仮名では、「ひ」「ふ」「へ」においてはその語例の半数近くが八行動詞活用語尾が占める。次の通りである。

は20語(うち八行動詞活用語尾7語) あはせ・いはれたる・おも

はさら・おもひあはせ・しめゆはて・とはまし・なきあはせ

ひ23語(八行動詞20語) いひ言・いひあつめ・いひしらす・い

ひたはふれ・いひなれ・いひにくき・うたかひをける・おひいて

生出・おひさき生先・おもひ・おもひあはす・おもひいて・おも

ひしほみ・おもひみたる・おもひめぐらして・さふらひ・たまひ・

にほひ・はひかくれ這・わつらひて

ふ20語(八行動詞10語) いふ・うちはらふ・うつろふ・おもふ・

かすふ数・さふらふ・しめゆふ・たまふ・てふ言・にほふ

へ14語(八行動詞6語) いへる・おもへと・きえかへり・くはへて・

そへて・たまへり

異なり語数で、「は」7語、「ひ」20語、「ふ」10語、「へ」6語である。八行動詞活用語尾は、この『齋宮歌合天禄三年』のみならず全歌合においてワ行に書く例が検出されていない(前掲の歌合全ての語例を参照していただきたい)。八行動詞の場合、活用形をもつことが古形を保持させるのだと考えられる。八行動詞を発音通りにワ行でなく八行に書くという習慣は、本来ワ行動詞である「植う」「据う」やウ音便「おもたまへ」を時に「うふ(へ)」「すふ(へ)」「おもふたまへ」と書くという類推を生じさせている。「うぶる花の」(1104)、「ものをすへられ

たり(1108)、「おもふたまへ(1108)等がみえている。こうした誤った類推を時に許容してしまう、ワ行に発音する動詞をハ行に書くという表記の規則性を指摘することができる。ハ行動詞の規則性に対して、ワ行動詞に規則性はない。例えば「うゑしうへはつかのまもなくかるかやを」(801)のように、流動的である(注1)。

三 仮名遣の意識

前節ではハ行動詞に見られる表記の規則性を指摘したが、これを習慣としての仮名遣と見たい。(注2)ここでは、ミセケチや書き入れによる仮名遣の意識を指摘しておきたい。二十巻本『類聚歌合』には、校合の結果として歌合本文に本文異同や訂正を示すミセケチや書き入れがあるが、それは仮名の相違を指示するのに用いられることがある。次に全ての例を示す。

〔書き入れ〕

- a もみちはをふきこすかせにたつた山みねの／まつにも
にしきを「お」りかく (太皇太后宮扇合0503 十二番紅葉右)
 - b としふかみなをしもを「お」くにかれせぬは／君かことの「は」の「は」やしなりけり (斎宮歌合天祿三年0801 仮名日記中歌)
 - c みねたにやすみうくならんあしひぎのやま／たち花の
みやまひ「ゐ」をせる (本院左大臣家歌合1102 山たち花右)
 - 〔ミセケチ〕
 - d いとお「を」かし (関白左大臣家歌合1106 仮名日記)
 - e くちにけるすけのお「を」みのおのつからふ／るさみたれの
ほとをしるかな (新中将家歌合1503 九番右)
- a、cの本文は第二種甲類、dは第十二種、eは第二種丙類の筆

跡である。行の傍らに書き込まれた字は本文と同筆と判断される。「お」または「お↓を」が4例「ひ↓ゐ」が1例と、「を」「お」の使い分けに関する訂正に多く見られ、「を」「お」の使い分けは、一部の語で動揺する中にも、語によつては書写者(もしくは書写者が見ている本)がこれらの仮名遣に意識的であったといえる。とはいえ、a「おりかく」d「をかし」は、同じ歌合の中で同語が訂正されない形「をりしく」「おかし」があり徹底はしない。

c「やまる(病)」は、歴史的仮名遣とは異なる形が書き入れによつて指示されている。ハ行動詞をもたないために歴史的仮名遣から離れやすいのだろう。「まいる」とともに表記が旧音との対応と離れていく形が、数は少ないながら表出している。(注3)

四 具体例

以下には、仮名遣の具体例を巻の順にあげておく。同じ歌合の中で表記にゆれが見られる場合に限って、○を付し例を示した。

- 0501 皇后宮歌合治暦二年(第一種乙類、B野紙)
〔ゐ↓い〕人々の御もとに／返しまいらせたまふとて (詞書)
- 0502 皇后宮歌合天喜四年本文(第二種甲類、A野紙、財字印)
〔を↓お〕たかさこのおのへのしかをこくふねは (六番右歌)
- 〔ゑ↓へ〕こすへは／かせの「こすへ」なから… (六番左歌・判)
- 〔ゑ↓へ〕すへはいま／しとて／よみわらひこめられぬ(六番右判)
- 0503 太皇太后宮扇合(第二種甲類、A野紙、財字印)
〔お↓を〕みかさやまみねのをさ／にをく露 (月右歌)
- 〔お↓を〕せきの／をかはに／しきをりしく「織」 (十一番紅葉左)
- 〔を↓お〕うち山のおのへのしか／のよはのひとこゑ (しか右)

〔は↓わ〕かりかねのう／＼のそらにもきこゆなるかな (かり左)
〔ふ↓う〕〔ほ↓を〕とをたうみのめのと (きり左 歌人)

※仮名遣指示・書き入れ にしきを「お」りかく (十二番紅葉右)

0701 女四宮侍所歌合 (第八種、A野紙、財字印)

隣接する歌で表記のゆれがみられる。

〔は↓わ〕あらをたになわしろみつをますらははおもひく／＼にまか

せてそひく (四番苗代左 仮名文字遣「なわしろみつ」)

cf. はるくれはなはしろみつをまかすとてを／＼たのさとひといとな
かりけり (四番苗代右 仮名文字遣「な盤しろみつ」)

0801 齋院歌合天禄三年 (第一種甲類、第二種甲類、A野紙、財字印)

同一筆で、隣接する同じ語に表記のゆれがみられる。

〔ゑ↓へ〕うゑしうへはつかのまもなくかるかやを(かるかや右第二種)

cf. 「うゑ」させたまひ(仮名 第一種)

複合動詞「置く」は「を」、「露」置くは「お」の傾向。

〔お↓を〕けふのことをかきをかせたまふ (仮名日記 第二種)

〔お↓を〕うたか／＼をけるつゆそはかなき(なてしこ判歌 第二種)

〔お↓を〕なきさにすてをくれたらん心ち (判 第二種)

〔お↓を〕かきしるしてたてまつりを／＼ (前仮名日記 第二種)

cf. 「たてまつりおく」(冒頭仮名日記 第二種)

cf. 「つゆかむすひおきけむ」(薄左)、他2例

※仮名遣指示・書き入れ しもを「お」く(仮名日記中歌 第二種)

〔を↓お〕「踊」こなたしもなひきおとるは／＼かへし (23)、他2例

〔わ↓は〕こゑよはくなりぬ (前仮名日記 第二種)

〔ゐ↓い〕したかふまいりて (前仮名日記 第二種)

〔を↓ほ〕しほに(仮名日記 第一種) cf. 「しを」に (仮名 第二種)

〔を↓ほ〕としふかみなを(前掲) cf. 「なほ」(なてしこ第二種) 他5例

重点〔を↓ほ〕などあさかほ(草のかう判歌 第二種)

0802 齋院歌合長久元年 (第一種甲類、A野紙、財字印)

〔わ↓は〕たつさはくあしのもとはを(15) cf. 「たつさわく」(9)

〔ゐ↓い〕もてまいりあつまる(仮名日記) 他2例(仮名日記)

〔ゐ↓い〕まいらせたるすはまのうち(仮名日記) 他2例(仮名日記)

〔ゑ↓へ〕「故」たれゆへとかはあさりをもする (35)

〔を↓お〕おかしけにおはします (仮名日記)

重点〔お↓を〕ふ／＼な人ゆきちかひたるを／＼ろし (仮名日記)

0803 齋院歌合永保三年 (第二種乙類、B野紙)

〔ほ↓を〕「猶」さかきはのちと／＼やちとせなをといふらむ (神楽左)

0804 齋院歌合冬五題十番 (第一種甲類、A野紙、俊字花押)

該当なし

0805 齋院歌合夏六題六番 (第一種甲類、A野紙、俊字花押)

該当なし

0806 齋院歌合仲春十二題十二番 (第一種甲類、A野紙、俊字花押)

〔ゑ↓へ〕「行末」ゆくすへのひさしかるへき君かよは (祝右)

0807 齋院歌合富蒲一題三番 (第一種甲類、A野紙、俊字花押)

該当なし

0808 齋院歌合春三題廿一番 (第一種甲類、A野紙、俊字花押)

〔ほ↓を〕「遠江」とをたあふみ (5歌人) 他2例

〔ほ↓を〕「佐保川」つく／＼とふる春さめにさをかはの (27)

0809 齋院歌合夏三題三番 (第一種甲類、A野紙、束字花押)

〔ゐ↓い〕まいりやしきふら／＼はまし (仮名日記)

0810 齋院歌合物語題九番 (第一種甲類、A野紙、俊字花押)

〔を↓ほ〕花立はなのかほりなりけり（いはかきぬまのかり）他1例

0811 齋院歌合暮春十二題十二番（第一種甲類、A野紙、俊字花押）

〔わ↓は〕あき／るきゝすのさはくおとして（きゝす左）

〔ゑ↓へ〕こ／すへをかけてさけるふちなみ（ふち右）

0812 齋院歌合夏一題六番（第一種甲類、A野紙、俊字花押）

該当なし

0813 齋院歌合初秋六題七番（第一種甲類、A野紙、俊字花押）

〔ゑ↓へ〕あはれともかけぬ君ゆへうちかへし（恋三番右）

0814 齋院歌合夏二題十二番（第一種甲類、A野紙、俊字花押）

次の例は「…草はにおとる」と書いて「おとる」をミセケチし下に

「まかふ…」と訂正したもの。第一種甲類書写時の訂正。

〔を↓お〕「踊」ゆふまくれ草はにまかふ「おとる」ほたるを／はつゆ

のみかける玉かとそみる（草虫似露二番左）

〔わ↓は〕くもるにて心さはかすほとゝぎす（遠聞郭公六番左）

0815 齋院歌合秋十五題十五番（第一種甲類、A野紙）

〔わ↓は〕くつはむし（目録題）他3例

〔ほ↓を〕「庵」山たもるしつのをにはあきかせに（秋田左）

0901 麗景殿女御歌合（第二種甲類、A野紙、財字印）

〔お↓を〕かねのすきはこ／をうちをにきて（仮名日記）

〔は↓わ〕うるわしくなりて（仮名日記）

〔ゐ↓い〕まいりたまへり（仮名日記）、他1例

〔ゑ↓へ〕まつおほくうへたる（仮名日記）

〔ゑ↓へ〕すへいまめかしく心あり（うの花右判）

〔ゑ↓へ〕ゆくすへも／ときはまつのことのはを（仮名日記）

0902 京極御息所歌合（第二種甲類、A野紙、財字印）

〔お↓を〕「劣」こと／しの春にをとりけりやと（本十九番右）

他1例 ㊦「され／とみきおとれり」（本四右判）

〔ゐ↓い〕おまへにもまいらせける（仮名日記）

〔ほ↓を〕ゆくさきに春をとをくしまかすれば（本十一左）

本文「まき」「蒔」の右に「うへ」「植」と同筆で書き入れる。

〔ゑ↓へ〕わかこふるひとやまき「うへ」けむ（本二十一右）

1001 陽成院一宮歌合（第一種甲類、A野紙、財字印） 該当なし

1002 陽成院第一親王妃歌合（第二種甲類、A野紙、財字印）

隣接する本歌と左歌で表記にゆれがみられる。

〔を↓お〕まねくにしあきのとまらぬものならはおはな／のそてやせ

はくなりなん（31左） ㊦「ゆく秋をまねくをはなのたもと

には露もおき／あへすのとけからねは」（30本）

近接する本歌と右歌で表記にゆれがみられる。

〔ほ↓を〕いくしをもしくればふらしさをひめのふかくそ／めたるい

ろとこそ見れ（8右） ㊦「いくしほ」（6本）

〔お↓を〕ゆく秋をとゝむるこまはをそければ（十八番右）

〔ほ↓を〕さをひめのふかくそ／めたるいろとこそ見れ（8）

〔ほ↓を〕さを山のはゝそのもみちりぬへみ（9本）他5例

1003 仁和二宮歌合（第二種甲類、A野紙、財字印）

「露おく」は「お」にゆれる。（二番左）他4例

〔お↓を〕山たもるあきのかりほにをく露は ㊦「露のかけはかも」（12）、他3例

〔は↓わ〕あまの／かわらをたちもならずか（40）

〔は↓わ〕かりのみとうわのそらなるなみたこそ（49）

〔ひ↓ゐ〕なにしおはゝしゐてたのまむをみなへし（37）

1101 小一条太政大臣家歌合(第一種甲類、第二種甲類、A野紙、財字印)

〔糸↓へ〕もろともにくさはうへしに (しをん左)、他2例

㊦「うゑわたして」(仮名序 第一種)、他2例

1102 本院左大臣家歌合(第二種甲類、A野紙、財字印)

仮名遣の指示・書き入れ

〔ひ↓ゐ〕たち花のみやまひ「ゐ」をせる (山たち花右)

1103 坊城右大臣家歌合(第二種甲類、A野紙、財字印)

〔ひ↓ゐ〕ゆける (すすき右歌人)

〔ほ↓を〕なかとを (まゆみ左歌人)

1104 三条左大臣家歌合(第二種甲類、A野紙、財字印)

〔お↓を〕つゆやをくくらんこゑたかくなく (左ひてき)

〔う↓ふ〕きしちかくほりうふる花のいろになみ (左保胤)

1105 太政大臣家歌合(第十一種、A野紙、財字印)

〔お↓を〕きみかよにまつとみつとはをのつから (祐拳)

〔わ↓は〕さほかぬみつにかけそ見えつゝ (左長能)

〔ほ↓を〕とをやまかけていまそなくなる (左為時)

㊦「とほく」他1例

1106 関白左大臣家歌合(第十二種、N無野紙)

「をかし」は「お」を「でゆれる」。

※一カ所、仮名遣の指示・ミセケチ یتとお「を」かし(仮名日記)

〔を↓お〕左におかしきおほえあり (一番月判)、他3例

㊦「をかしき」(仮名日記) 他6例(ミセケチの例を含む)

〔わ↓は〕さはきたちて (仮名日記)

〔ゐ↓い〕まいりてよる (仮名日記)、他2例

〔う↓ふ〕おまへにすふへきに(仮名日記) ㊦「すゑて」(仮名日記)

〔ほ↓を〕なをみゆること (仮名日記)

1107 関白左大臣家藏人所歌合(第一種乙類、B野紙)

〔お↓を〕をそくそ月の影はずみける (水上待月右)

〔お↓を〕こまからにしきをりそかくらし (山家紅葉左)

〔ほ↓を〕ほとゝをみをちのかはきしこすなみは (二番左)

1108 前太政大臣家歌合

仮名日記(第一種乙類、C野紙、円朱印)

同行で表記のゆれがみられる。

をこの哥たてまつる、これもおとこいつ／巻にかきたり

〔を↓お〕おとこ女の時の哥読、他1例(前掲)、㊦「を」とこ」(前掲)

〔お↓を〕をのくたてまつりたる

〔ゐ↓い〕もてまいる、他2例

〔ゐ↓い〕たひくまいらす ㊦「たなこひ」2例

〔ひ↓ゐ〕たなこゝゐのたい

〔う↓ふ〕おもふたまへ

〔糸↓へ〕ものをすへられたり

〔糸↓へ〕すへのよのそしり

漢語「え↓ゑ」さいはらうゑい

歌合本文(第一種甲類、A野紙、財字印)

「とほし」を「し」はゆれが著しい。

〔ほ↓を〕うたの心はとをくて (二番左判)、他5例

㊦「とほく」(郭公二番判)、他2例

〔お↓を〕御気色をとられたり (難陳 後帥)

〔は↓わ〕いとうるわしうよまれ／たる (二番左判)、他1例

〔ゐ↓い〕まいらすへきに (難陳 後筑)、他1例

〔う↓ふ〕おもふたまふれ (二番右判)、他2例

cf 「おも₁たまふれ」(難陳 後筑)

「ゑ↓へ」はなゆ₁へにか₁らぬやまはなかりけり (三番右)、他1例

「ゑ↓へ」す₁のよ (難陳 後筑)

cf 「す₁ゑ₁のよ」(月二番左判)、他1例

「ほ↓を」さくらいろの₁いまひとしを₁君しそむれは (難陳)

1401 右兵衛督家歌合(第二種丙類、N無野紙、E野目録反古紙背)

該当なし

1501 蔵人頭家歌合(第一種甲類、A野紙) 該当なし

1502 頭中将家歌合(第一種甲類、A野紙)

「を↓ほ」かほるかのなつかしければ (花橘左)

1503 新中将家歌合(第二種丙類、E野紙) 該当なし

※仮名遣の指示・ミセケチ すけのお 「を」(九番右)

1504 兵衛佐家歌合(第一種丙類、E野紙)

「ほ↓を」とをちよりふきくる風のはひこそ (十二番右)

1505 左近権中将家歌合(第五種、B野紙)

こゝでは「おと(音)」「おき(起)」など他の歌合本文で歴史的仮名遣に一致する語が一致しない例として挙がっていることに注意される。「をかし」は判詞毎に「を」「お」にゆれ、「折れふして」「起き」は歌と判詞で仮名遣がゆれる。他の筆跡には見られない傾向である。陽明文庫所蔵『類聚歌合』では、第五筆はこの一度のみ。

「を↓お」おかしさ (三番五月右判)

cf 「をかしく」(四番盧橘左判)、他多数

「を↓お」おれふすと／おきぬとはおなしこゝろ (六番瞿麦左判)

cf 「をれふして」(六番瞿麦左)

「お↓を」をのかこそ (二番右判)、他1例

cf 「おのく」(十番祝判)

「お↓を」つゆを₁もみまたをれふして (六番瞿麦左)

「お↓を」とこなつ／のを₁きぬやはなのあさはなるらん (同)

cf 「おきぬ」(六番瞿麦左判)、同じ箇所1例

「お↓を」さとこと₁た₁くくひなのを₁とすなり (八番右)

「お↓を」生・老₁かすかやまを₁ひそふまつのいやましに (十番祝左)

「ゑ↓へ」す₁のなみ (三番五月雨左判)

cf 「す₁ゑ」(一番郭公右判)、他1例

「川」が縁語の例。

「わ↓は」わかこひはあまのかるもにみたれつ／か₁はくときなきなみのしたくさ (十一番恋右)

1601 東宮学士家歌合(第十三種、E野紙)

「お↓を」勝負をもさためを₁きて (仮名日記)

cf 「ひきおく」(引糸女右)、「おきて」(取苗人左判)

「を↓ほ」かほりたる (盧橘芳風判)

1801 内蔵頭家歌合七題八番(第一種丙類、N無野紙、A野目録反古紙背)

「わ↓は」ほと₁きすなくしほやまのいそ₁はには (三番郭公右)

「わ↓は」いかてなみたのか₁はかさるらん (七番恋左)

1802 内蔵頭家歌合三題十八番(第一種丙類・第十五種、N無野紙、A野目録反古紙背)

本文中、八番より十二番まで第十五種の筆が出現する。

「お↓を」あさまたきを₁くしらつゆを₁さま₁く₁に

(七番覆麦左 第一種丙類)、他1例(第十五筆)

ㇿ「おかなむ」(十番左 第十五筆)、他1例(同筆)

〔ゑ↓へ〕こゑは心に「と」まるものゆへ(一番郭公左 第一種丙類)

9901 皇后宮歌合天喜四年(標題第一種乙類、本文第二種甲類、但

この甲類は乙類に近い、C野紙)

皇后宮歌合天喜四年0502の仮名日記である。

〔お↓を〕織物 をりもの 他4例

〔お↓を〕織 もんをりて ㇿ「おりつけられて」

〔は↓わ〕ふせれうのうわき 他5例

漢語〔は↓わ〕すわう

〔ゐ↓い〕まいらせ給

〔ゐ↓い〕まいりたまへり 他2例

〔ゑ↓へ〕すへのはる

〔ゑ↓へ〕もみちをうへて

〔ほ↓を〕はなのにをひ 他1例

〔ほ↓を〕にゝをはし ㇿ「にほひ」2例

〔ほ↓を〕御なをし

9902 齋院歌合九月十三夜(第一種甲類、A野紙) 該当なし

9903 齋院歌合立秋(第一種甲類、A野紙)

〔ほ↓を〕とをたあふみ

(3歌人)

五 まとめ

陽明文庫蔵二十卷本『類聚歌合』のアハワ行の表記の実態は以下の通りである。

歴史的仮名遣に近い表記が実現している。歴史的仮名遣に一致しない表記がとられるのは、基本的に八行転呼音現象に関する場合「八行↓ワ行」「ワ行↓八行」の場合と、オ・ヲに関して「を↓お」「お↓を」の一部の語に限られる。

「まいる」「まいらす」は「い」表記で固定している。

八行動詞は八行表記で固定している。

筆跡別、編纂時期、歌合主催時期の相違は、表記に著しい差を認めない。但し、第五筆による「左近権中将家歌合」(1505)は、「を

と」(音)、「をひ」(生)などオ・ヲの表記の混乱が進んでいる。

安定した表記にみえつつも、その一方で

同じ歌合の中で、「を」「お」で表記が著しくゆれる語がある。「ゝ

をく」(置)「をかし」がある。

があり、また

「ゆへ」「ゆゑ」「うへ」「うゑ」など二様の表記がみえる。

このことは、仮名遣の混乱が少なくみえるが、続く時代の仮名表記

のあり方のきざしを含んでいるといえる。

以上、陽明文庫蔵二十卷本『類聚歌合』について仮名遣の実態調査を

行ったが、他の文献との比較、十二世紀の表記原理について述べるこ

とは今後の課題としたい。

注

(1) 一歌合をもって解釈することがためられるが、八行の中で「ひ」

「ふ」「へ」が歴史的仮名遣に不一致となる語数が少ないのは、八

行動詞の占める割合の高さがあることを予想しておきたい。

(2) ここでいう仮名遣と馬淵(一九六九)の平安かなづかいとの対

応関係については尚具体的な調査を進めたい。

(3) 遠藤（二〇〇五）の『三十六人集』とは、歌数が異なるため単純には比較できないが、比較的『類聚歌合』の方が古態を保っているようにみえる。

馬淵和夫（一九六九）『平安かなづかい』について『佐伯梅友博士古稀記念国語学論集』 表現社

参考文献

- 遠藤邦基（二〇〇四）『平仮名資料としてみた類聚古集』『萬葉』一八九号
- （二〇〇五）『西本願寺本三十六人集の表記―資料編―』『関西大学 文学論集』第五十五卷第一号
- （二〇〇六 a）『元永本古今集・伝公任本古今集の表記―資料編―』『関西大学 文学論集』第五十六卷第一号
- （二〇〇六 b）『西本願寺本三十六人集の転呼音表記―十二世紀初期の非古典仮名づかい』『国文学』第九十号
- （二〇〇七）『平安時代写の絵巻物詞書の表記―資料編―』『関西大学 文学論集』第五十七卷第一号
- 今野真二（二〇〇一）『平安時代末期から鎌倉時代初期の諸相』『仮名表記論攷』第一章 清文堂
- 萩谷 朴（一九五七）『平安朝歌合の書志』『平安朝歌合大成』第十卷第五章 同朋社出版
- （一九七五）解説『廿卷本『類聚歌合』について』『平安歌合集』下 陽明叢書国書篇
- 長谷川千秋（二〇〇七）『仮名遣の多様性―定家以前の仮名遣―』日本語学会二〇〇七年度春季大会予稿集
- 堀部正二（一九四五）『纂輯類聚歌合とその研究』大学堂書店
- 山内育男（一九七二）『かなづかいの歴史』『講座国語史』第二卷 大修館